

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 3 日現在

機関番号：11301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26884006

研究課題名(和文)人類史における国家形成プロセスの解明にむけた理論と実践の基盤構築

研究課題名(英文) Construction of the Foundation about Theory and Practice to Clarify the State Formation Process in the Human History

研究代表者

有松 唯 (ARIMATSU, Yui)

東北大学・学際科学フロンティア研究所・助教

研究者番号：60732112

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：人類の技術的、文化的進歩の必然的帰結といったイメージが付与されてきた国家の形成プロセスについて、理論の整理と考古学的証拠から、そこでの画期的実態が、生態との平衡を保った持続的社會から、拡大再生産を希求せざるをえない不安定な社會への移行であることを指摘した。ひいては國家は人の社會と生態との關係が不安定にならざるを得ないからこそ生じた集團化のしくみであることを仮説として提示した。さらに、実証研究を推進させ得るフィールドの確保にむけ、イラン・イスラム共和國での交渉・事前調査を実施し、現地での遺跡踏査を実施した結果、適う対象を選定することができた。

研究成果の概要(英文)：State formation process has been gives the images such as some inevitable consequence of cultural and technological progress. Based on the theoretical study and the archaeological study, this research suggests that this process had been the transition from sustainable society maintaining the balance with ecology to unstable society inevitably longing for extended reproduction. Thus, it is possible that the state itself has been a mechanism originated in the inevitable unstableness of the relationship between human society and ecology. In addition, towards securing the field where the empirical research could be progressed, negotiations and preliminary survey were conducted in the Islamic Republic of Iran. As a result, the suitable field and sites were founded.

研究分野：人文学

キーワード：国家 国家形成 考古学 物質文化 文化進化 西アジア

## 1. 研究開始当初の背景

人類社会の統合の一形態として一般化することになる国家は、どのように成立したのか。それは国家のもとにある現代社会や我々の成り立ちを解明するうえで有効な視点であり、様々な点で人類史上の普遍的課題を提示する。この国家形成研究の最適対象として、西アジアにおけるアケメネス朝ペルシャ（以下、アケメネス朝）の成立がある。同勢力は紀元前1千年紀、現在のイラン・イスラム共和国（以下、イラン）領を中心に成立した。それまでの他勢力と一線を画すのは、古代西アジア世界統一を実現して、文化的背景、生活様式、言語、信仰の異なる諸集団を包括し治めたことにある。それは社会・人類の進化的過程における画期的事象であり、それゆえ世界史上初の帝国、また近現代国家の要件をすでに満たしていたとも言われる。

応募者はこれまで、考古学的手法でアケメネス朝形成研究に取り組んできた。アケメネス朝は自著の史料に乏しいことから物的痕跡に依拠することで実証性を確保するとともに、アケメネス朝期とその形成期（鉄器時代：紀元前2千年紀半ばから3世紀半ば）を一貫した視点で分析できると考えたためである。従来、アケメネス朝の成立は西方のメソポタミアからの影響（軍事侵攻・文化伝播）に起因するという既成観念が根強くあり、関連する史上のイベントを画期として考察されてきた。確かにメソポタミアは新石器化や都市化の先進地である。しかしながらアケメネス朝を画期として、古代西アジアを統治する諸勢力はメソポタミアではなくイランから興るようになる。応募者はこの点に西アジア領域国家形成プロセスの史的意義・枢要があると考えた。

そこでイラン鉄器時代の自律性をあえて重視し、イラン北部の山岳地帯をフィールドとして研究活動を行ってきた。アケメネス朝の揺籃地と目され、かつ、西アジアを統一支配したイラン系王朝（アケメネス朝、アルサケス朝）と先行するメディア王国の首都がおかれた地域である。応募者は東京大学総合研究博物館所蔵のイラン北西部（ギーラーン州）出土副葬土器分析から、当地の物質文化変化の画期を抽出した。2000年以降イラン北西部で実施された現地調査にも参加して新規考古遺物の分析を加味し、基幹資源や生活様式、日常実践を共同する関係性の質的転換がアケメネス朝成立に先行して、おそらくは前提的にあったことを明らかにした。同時に、こうした人類社会の共通項に着目することで国家形成事象を人類史の俎上にのせる視点を着想した。

しかし一方、イラン北部を特徴付けるのは高い生態的多様性である。一区域についての

知見を普遍化することは憚られる。そこで、比較対象としてイラン北東部（ゴレスターン州）に着目した。ゴレスターンはギーラーンから直線距離で約500km東方に位置する。両地域間には中近東最高峰のエルボルズ山脈はじめ地理的障壁も在り、生態環境は大きく異なる。また、トランス・コーカサスに連なるギーラーンに対し、ゴレスターンは西アジアと中央アジアとの回廊として機能してきた。加えて、ゴレスターンではアケメネス朝の直接管理を示す建築や資料が検出されている。アケメネス朝生成プロセスへのこれまでの成果の位置付けも、当地を加味することでより具体化できると考えた。そこで当地の網羅的踏査・主要遺跡試掘で獲得された広島大学文学研究科所蔵考古遺物の資料化と分析に着手した。ギーラーンとの比較研究、物質文化の変化に沿った時期区分やセトルメント・パターンの抽出を個別に実施してきたが、資料化の完了と報告書としての総体の出版が懸案として残っている。加えて、当地の本格的な研究には、現地調査による層位データおよび理化学分析用試料の獲得が将来的に必要なことも認識した。

こうした考古学的研究に取り組む中で、非近現代・非西欧社会の国家形成に物的痕跡からアプローチする困難さを実感した。国家は近現代欧米社会の観察から定式化された概念である。起源は主にギリシャ・ローマ世界とギリシャ・ラテン語系史料に求められてきた。国家概念をこれら以外の世界に遡及させるには相当に慎重な理論的枠組みの設定と、それに沿った研究・分析手法の採用が求められる。しかし国家や関連する概念の研究は人文社会科学のほぼ全分野にわたっているがゆえに、こうした理論・方法・実証の平衡は確保し難い。理論研究と実証研究の分野は乖離し、他方を援用する意識・姿勢はあるものの、個々に膨大な蓄積があり且つ専門家コミュニティが重複しない環境では、双方に実利ある研究の実現は困難である。しかし本来的には双方向の研究でなければ個別にも成り立ち得ない。応募者は指導の委託で滞在したフランスの研究機関においてそうした研究が実践される現場に身を置き、そのことを実感した。そして国内でも同様の課題・問題意識を抱えている関連分野の研究者と出会い、議論の場を公式に設けることが有意なのではないかと考えた。

## 2. 研究の目的

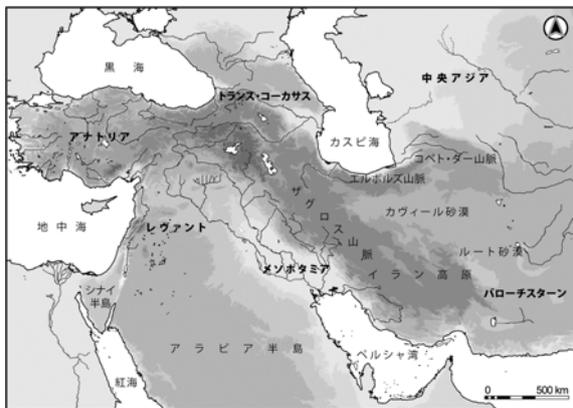
本研究では帝国と称される領域国家について、人類集団としての特性化と人類の進化的過程への位置付けを目指す。研究期間内には、そのための基盤造りとして第一に、人類史上最初の領域国家が揺籃した地域・時代を

対象とし、形成過程における集団動態の通時的分析を可能にする実証データを収集する。第二に、国家・帝国形成についての理論整理と新たな枠組みの提示、理論に沿った資料の獲得・分析・研究手法の開発にむけて、学際的研究体制の整備に着手する。

### 3. 研究の方法

まず、国家／国家形成についての理論を転換する。国家に類する大規模且つ複合的な集団／社会でも、日常実践を営む基本単位としては世帯や（疑似）親族に相当するまとまりが想定できる。これら基本単位を成す個別の集団化機序と文化的適応システム、そして統合の仕組みが、人類集団／社会の基層にあったと想定できる。そこで基層集団に視座を据え、変動のプロセスと画期を詳らかにし、人類史の俎上にのせる。この視点は、既存の理論との照らし合わせをとおり、あらたな国家／国家形成理論としての整備をおこなう。

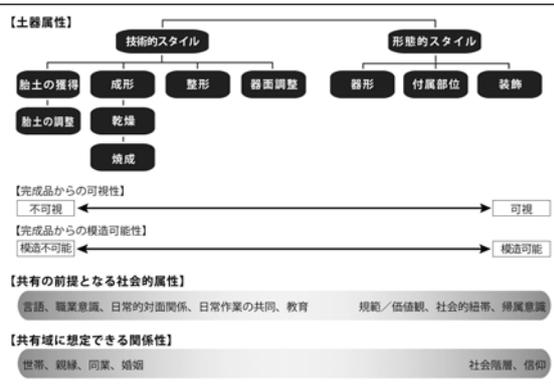
この論に沿って、人類史において国家と称される集団形態が確立する時期（紀元前2千年紀半ば～紀元前1千年紀後葉）について、集団動態の通時変化の解明を行う。対象地域は西アジアである（第1図）。高い変異性が他地域に先駆けて顕在化したことを重視し、選定した。ただし従来の研究では、なかでもメソポタミア地方が重視されてきた。対して本研究では後述する史的転換期を重視



第1図 西アジア全図

し、イラン地域に着目する。

対象時期・地域においては有意な史料が普遍ではないため、分析に際しては、人類活動の残滓や物的痕跡を扱う。とくに対象時期を通じて最も普遍的に確認できる土製器を対象とし、通時変化を観察した。対象地域で検出された計22483点の未発表土製器について、実見して得た知見にもとづき、機能・形態・製作技術等に関わる諸属性（第2図）の変化パターンを抽出した。同時に、これらが得られた473遺跡の年代比定も行い、セトルメントパターンと儀礼様式の通時変化も検



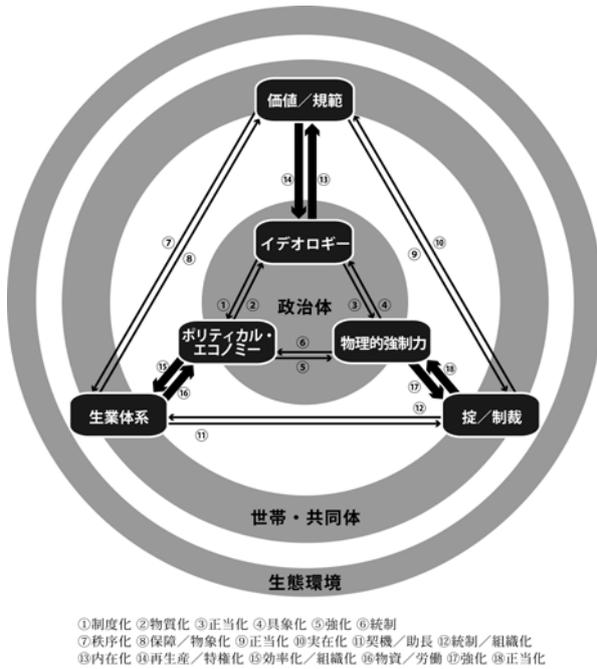
第2図 土製器諸属性の階層性

討した。なお明らかにした現象の考察は、民族学や文化人類学での知見を援用しながら行った。

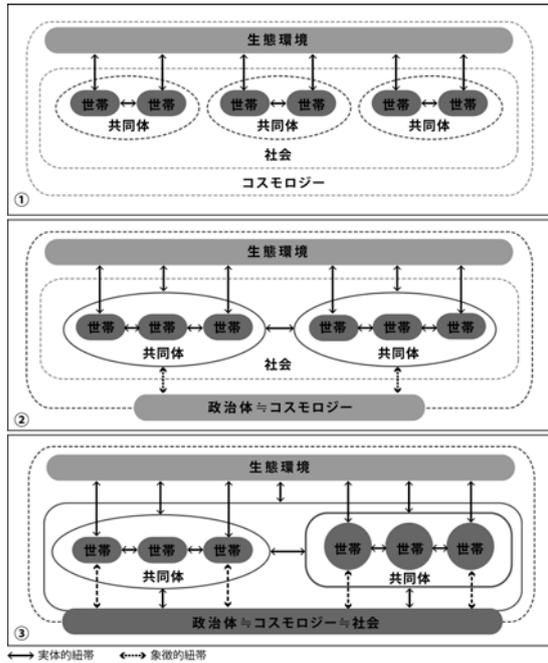
### 4. 研究成果

国家は堅強かつ安定的な社会システム、そして人類の技術的、文化的進歩の必然的帰結といったイメージが付与されてきた。しかし過去社会および近現代欧米社会以外の事例から導かれる実際として、国家は技術や文化の進歩があっても自生するとは限らない。むしろ例外的現象である。またこれまで国家形成研究で重視されてきた成分法規、常備軍、官僚機構、税制の成立などは、人類社会の局的位相であると同時に、国家形成の最終段階あるいはその後のみ結晶化した事象だといえる。形成プロセスの総体を解明し、人類にとっての真の意味を考察するには、人類社会の遍在的位相を主体とした国家の特性化が必要になる。すなわち、国家的機構は生態と人類社会の基本単位（世帯や共同体）との日常的相互作用のなかで生成されるなにかであり（第3図）、国家の形成は基本単位が自明的に基層化されている様態として、理論化できる（第4図③）。

西アジアにおける国家生成プロセスについても、国家イメージ一般についてと同様のバイアスが根強い。従来の見方では、国家の初現と発達、メソポタミア地方における累積的な社会・政治発展を前提としてきた。これは、灌漑農耕、都市（文字）といった、近現代欧米社会から遡及させた技術や文化の発明を画期とみなすことに由来する。くわえて、当地方で揺籃した古代勢力を欧米社会の直接の祖とする、聖書の記述に則った史観が暗黙的前提となっている。しかし、この史観には実際の現象との齟齬がある。まず、国家的機構が萌芽して以降の社会変化はカタストロフィが頻発する非線形の歴史であり、累積的進化は想定できない。さらに、起点として重視されてきた農耕や都市は国家形成の必要十分条件ではない。



第3図 国家概念模式図



第4図 人類社会と政治体

現時点での明らかな画期として着目に値するのは、アケメネス朝ペルシャ形成に表象される前1千年紀における国家的機構の変質だと考える。この時期おこるのは多民族を包括統治する領域としくみの出現であり、「国家」という術語で総称されてはいるが、以前の勢力とは本質的な相違が生じる。さらに、勢力の揺籃地がメソポタミアからイラン地域へと移行することからも、歴史基軸の不可逆的転換期と評価できる。

こうした視点から、イラン地域における人類集団の痕跡を分析した結果、アケメネス朝

形成前夜（前8世紀）における、生態的多様性を包括する規模での儀礼様式と生活様式の斉一化が明らかになった。これは、この時期特徴的な精製土製器（オレンジ・ウェア）の広域分布から推定した。ミクロナ多様性に沿った小規模集団が常態だった前段階を画期する現象と評価できる。

資源化戦略の相違を越える広域での紐帯が発現した背景として、集団化原理の変化も想定できる。まず、対面的関係のない他者との「われわれ意識」の共有という認知レベルの変化、さらに集団を再生産する社会的・文化的しくみの変化が推測される。前15世紀から前9世紀は、葬送儀礼における特殊財の大量消費による標準化メカニズムにより、上記小規模集団が長期にわたり再生産されていた。それが前8世紀以降、そうした葬送儀礼は衰退し、代わって、日常生活に接近した浸透性の高い様式的行為による再生産へ、移行した。同時におこった定住的生活様式の敷衍、資源化域の拡大、そして人口の急増という連鎖は、資源のさらなる要請へむかう拡大再生産のメカニズムへの移行を余儀なくしたと考えられる。

つまり、国家形成にむかう画期の実態は、生態との平衡を保った持続的社会から、拡大再生産を希求せざるをえない不安定な社会への移行である。これは不可逆的性質を持っていたがゆえにあくまで結果的に画期となった事態であり、必然の結果ではない。そうした現象があらわれるのは、約1000年をかけたヒトの他者認識や自然認識の内在的变化が、ある程度に横溢したことによる。「われわれ」の意識の変化は、社会の基本単位である世帯/共同体、親族の同定基準をも変化させると同時に、遠く離れた誰かがいる場所をも世界とみなす自然認識の変化と技術革新をはじめとする生態的適応システムの変化が相乗することで、実質的包摂の萌芽ともいべき資源化戦略の画期となった。そしてこれにともないおこる生業/居住形態の変化は、それらの実践単位としての世帯/共同体の規模・構成にさらなる変化をもたらすのである。

こうした循環的な相互作用がとりわけ昂揚した前1千年紀、均衡状態における上澄みとして国家的機構が表出する。「普通」の人々がおりなす在地社会の、こうした進化の結晶化部分がまさに国家機構とよばれるものなのであって、この時点では国家的機構はその原因とはなっていない。国家は人類が進歩した必然の帰結としてあらわれるものではなく、人類の至上のしくみでもない。人の社会と生態との関係が不安定にならざるを得ないからこそ生じた集団化のしくみである。広大な領域と複雑な構造をともなう領域国家

のような組織こそ、既存の慣習や対面式関係性をこえた大規模かつ重層的に人を集団化するしくみが不可欠だが、そのしくみ自体、国家機構が発明したというよりも、祖型はそもそもヒトと社会、ヒトと環境、社会と環境との循環的相互作用のプロセスにおいて自生して内在していたもので、ヒトや在地社会の変動が共鳴したことで制度化に至ると考えられるのである。あくまで結果的に、その事態を乗り越えることができたこのしくみはだから引き続いたし、引き続かせるためには拡大再生産していかなざるを得なかった。

今後は、上記齊一化現象の原理的解明と史の評価を進めたい。まず現象の推定起源地（イラン北東部）での遺跡踏査・発掘調査の実現により、年代測定用試料の獲得を目指す。この点は 27 年度、現地での折衝および事前調査の実施により具遺体的な目途をつけることができた。さらに生物進化、認知科学、系統学の専門家と共同した学際的研究によって、現象の人類史への還元を試行する。この点についても、本研究で構築した理論的仮説をもとに他の外部資金獲得が実現し、体制を整備することができた。実証と理論の双方について基盤を成すという本計画の目的は概ね達成されたと考える。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- ① Yui ARIMATSU, Homogénéisation de la céramique fine de la deuxième moitié de l'âge du Fer au nord de l'Iran dans le cadre de l'horizon à céramique de type de Orange ware, *Iranica Antiqua* 査読有, L, 2015, pp. 213-232

[学会発表] (計 7 件)

- ① Yui ARIMATSU, "Origin and Development of Pottery in Transcaucasus: Non-linear Qualitative Transition of Ceramic Vessels in the Early Neolithic Settlements", Oct. 2014, *International Meeting for Transpacific Perspectives on Post-Pleistocene Adaptations*, Tohoku University, Sendai.
- ② 中尾 央・田村 光平・有松 唯「考古学の方法論を問い直す」、共同、2015年5月、日本考古学協会 2015 年度総会・大会、東京都・帝京大学
- ③ 有松 唯、「帝国の基層 - 西アジア領域国家形成過程の人類集団 -」、単独、第7回クワトロセミナー、宮城・東北大学、2015年5月19日

- ④ 有松 唯、「イラン - イスラーム国家の考古学・文化財保護と博物館」、単独、シンポジウム「イスラームと文化遺産」、東京都・早稲田大学、2015年10月4日

- ⑤ Yui ARIMATSU, "Last painted pottery and first Gray ware in North-East Iran", 13 Oct. 2015, *International Congress of Young Archaeologist*, Tehran University, Tehran (Iran).

- ⑥ 有松 唯、「国家の起源と成り立ち - 人類史の新たな画期をもとめて -」、単独、第1回TUMUG Forum、宮城・東北大学、2015年11月24日

- ⑦ 有松 唯、「『国家の登場』とグローバリゼーション」、単独、シンポジウム「人類史におけるグローバリゼーションと古代西アジア」、東京・早稲田大学、2016年1月30日

[図書] (計 1 件)

- ① 有松 唯、東北大学出版会、帝国の基層 - 西アジア領域国家形成過程の人類集団 -、2015、386

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

有松 唯 (ARIMATSU, Yui)  
東北大学・学際科学フロンティア研究所・助教  
研究者番号：60732112

##### (2) 研究分担者

— ( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

— ( )

研究者番号：